

研究プロジェクト名：宗教概念批判を経由した宗教哲学の可能性についての総合的研究

研究代表者：下田和宣

研究分担者：樽田勇樹、根無一行、古荘匡義、山根秀介

1. 本研究の成果

本研究プロジェクトは、世俗と切り離された「宗教」(religion) 概念の西洋近代的な形成を批判的に問い直し、そのうえでなおいかなる宗教哲学的思索が可能であるかを多様な視点のもとで追究する試みである。「宗教概念批判」という問題意識をベースとして、それぞれの研究は定期的な研究会における共同討議によって検討され、2021年9月の日本宗教学会第80回学術大会パネル(「宗教哲学研究から見た宗教概念批判の意義」、代表者：下田、提題者：樽田、根無、古荘、コメント：山根)、2022年9月の日本宗教学会第81回学術大会パネル(「虚実性の宗教哲学—「宗教」概念の死後の生」、代表者：根無、提題者：下田、根無、古荘、山根、コメント：樽田)として公表された(それらはそれぞれ『龍谷大学社会学部紀要』の59号(2021年)および62号(2022年)において活字化されている)。最終的に、「宗教概念批判」を現代的な精神的状況と結びつけるものとして、『ポスト・ヒューマニティ時代の宗教—「宗教概念批判」以降の宗教と人間』(勁草書房)を2025年12月に刊行した。

2. それぞれの論点

研究の成果として「宗教概念批判」以後の宗教哲学をひとつの決定的なかたちにまとめたうえで提示することはなかったが、各人が問題意識を共有したうえでそれぞれの立場から、「宗教」概念の実体的な理解に拘束されない緩やかな宗教研究の諸可能性を提示できたという点で、より実りのあるものとなったと言える。以下、それぞれの論点をまとめる。

下田はタラル・アサドによる系譜学的な宗教概念批判を出発点とし、その議論が必ずしも「宗教」概念ないし「宗教学」の端的な否定に向かっているわけではないことを明らかにした。西洋近代に形成された宗教概念の限定を自覚したうえで、それに代わる「真正な」宗教概念を対置するのではなく、むしろ概念の歴史的な形成が抱えるダイナミズムを主題化する。ラトゥールやブルーメンベルクを手引きとすることで、「文化」と「宗教」の二元論を解きほぐし、非宗教的な場面で宗教概念が結晶化する現場に目を向けることの必要性を説いた。

樽田は、宗教哲学における「宗教」概念の受け取り方の中から、宗教という語が出てくる歴史社会的・人間学的な状況そのものを問い直す思索に着目し、その具体例としてマルテ

イン・ハイデガーと西谷啓治を考察した。哲学と信仰の緊張関係の中で思索した若きハイデガーの思索において宗教という論点は、事実性（歴史性）の問題を指し示すことで西洋近代的、ひいては西洋的な哲学全体を問い直す視座を開いている。さらに、ハイデガーと同様、西谷においてもやはり宗教は近代的ひいては伝統的な哲学の体制をそれとして捉え解体する視座として受け止められる。しかし、ハイデガーにおいてはこの視座から哲学史が新たに探究されていくのに対し、西谷は、哲学を伝統的文脈とは異なった文脈へと開く。その結果として、西谷において哲学は、新たに大乘仏教の伝統との接点において、解体された「菩薩道」的行の一つと位置づけ直されて遂行されているといえる。

根無は、宗教概念批判を踏まえた宗教哲学的課題として「宗教」概念を解体的に再定義していくための視座を「ポストコロニアル」に見出した。宗教哲学はポストコロニアル的視座をどのように構築しうるかを考える際、まず注目したのは、宗教哲学がこれまで「アウシュヴィッツ」を特権的参照項としてきたという事実である。そのような宗教哲学的思索は「パレスチナ」的苦悩を取りこぼしているという考察から、非西洋圏の宗教哲学はその苦悩にどのようにアプローチできるのかという問題意識が導かれる。たとえば「祈り」というものに関して、従来の宗教哲学における「真の祈り」と「偽の祈り（ex. 現世利益）」という境界を揺さぶる必要がある。そのために提示したのが「自己への嘘」という概念である。

古荘は、宗教概念批判の観点から初期の姉崎正治の思想を扱い、近代日本における宗教および宗教哲学概念の系譜の一端を明らかにした。姉崎の『宗教学概論』は日本の宗教学および宗教概念の形成に重要な貢献をなしたが、この書の背景にはハルトマン『宗教哲学』など、宗教哲学の思想体系があった。しかも姉崎は留学や宗教的な体験を経て、『宗教学概論』のような体系的な宗教学の構築を断念し、自らの宗教的な世界観を表明する『復活の曙光』を著す。古荘は、『復活の曙光』における世界観の表明も一種の「宗教哲学」とみなすことで、初期姉崎において宗教および宗教哲学の概念が留学や宗教的体験を経てどのように変遷したのかを解明した。

山根は、ウィリアム・ジェイムズの「宗教」概念の一般的な理解とは異なる解釈の可能性を示した。ジェイムズの宗教論は個人的で内面的な信仰や経験を宗教の根源とし、宗教のそれ以外の側面を見逃しているとしばしば批判される。しかしプラグマティズムの視点を組み込むことで、現実の宗教が人々に信仰され実践されるなかで発展していくという集団的・共同的な要素をも、ジェイムズの宗教論は重視した。それは、科学と宗教とを切り分け、前者は学問の対象であるが後者はそうではないとする二分法への抵抗ともなる。宗教的観念はそれを信じる人間の実践により繰り返し検証され、今後も採用すべき真理として維持されるのか否かが判別されるもので、その点で科学的な仮説と区別する必要はないとジェイムズは考えた。

3. 本研究プロジェクトによる主要成果（刊行物）一覧

a. 書籍

- 古荘匡義『綱島梁川の宗教哲学と実践』（龍谷大学国際社会文化研究所叢書 31 巻）、法蔵館、2022 年。
- 伊原木大祐・竹内綱史・古荘匡義編『宗教学（3STEP シリーズ 4）』、昭和堂、2023 年。
根無一行「第 2 章 悪の問題——無関係ではられない熱い問題」
古荘匡義「第 6 章 祈りと宗教体験 ——宗教の本質を求めて」
下田和宣「終章 宗教学のこれから——「宗教とは何か」という問いを考え直す」
- 古荘匡義編『ポスト・ヒューマニティ時代の宗教—〈宗教概念批判〉以降の宗教と人間』（龍谷大学国際社会文化研究所叢書 37 巻）、勁草書房、2025 年。
山根秀介「第 3 章 「多神教」は哲学においてどのように語られてきたか——近代のいくつかの事例を手がかりとして」
古荘匡義「第 5 章 「生きられた神秘」としての宗教哲学——姉崎正治について」
樽田勇樹「第 6 章 問いとしての宗教——西谷啓治による学と哲学の実践的意味の取り返し」
根無一行「第 8 章 置き去りにされたパレスチナ人たち——ポストコロニアルの宗教哲学序論」
下田和宣「第 10 章 グノーシス主義の回帰？——ポストヒューマン時代の宗教概念」

b. 論文

下田和宣

- 「宗教の概念と生活の形式—タラル・アサドの哲学的コンテクスト」、龍谷大学社会学部学会編『龍谷大学社会学部紀要』、59 号、2021 年、39-50 頁。
- 「事実をつくりあげる—宗教概念批判の観点からラトゥールの物神事実論を読む—」、龍谷大学社会学部学会編『龍谷大学社会学部紀要』、62 号、2022 年、129-139 頁。
- 「宗教と文化の哲学のために—「宗教」概念批判と二十世紀ドイツ概念史研究の交点から」、宗教哲学学会編『宗教哲学研究』、40 号、2023 年、1-14 頁。

樽田勇樹

- 「初期ハイデガーにおけるギリシア的哲学概念の異化」、関西哲学会編『アルケー』、29 巻、2021 年、52-63 頁。
- 「西谷啓治と初期ハイデガーにおける哲学と歴史の問題」、日独文化研究所編『無／空の思想の現在と展望』、2024 年、131-141 頁。

古荘匡義

- 「宗教体験に基づく複合宗教実践の諸相 —— 綱島梁川から西田天香へ」、『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』、22号、2020年、203-215頁。
- 「綱島梁川における見神と批評」、『宗教と倫理』、20号、2020年、65-79頁。
- 「証言としての宗教体験言説 —— 綱島梁川の思想と実践一」、『世界仏教文化研究』、4号、2021年、75-94頁。
- 「綱島梁川の宗教体験と宗教哲学」、『宗教哲学研究』、38号、2021年、48-60頁。
- 「綱島梁川の言語ゲーム」、龍谷大学社会学部学会編『龍谷大学社会学部紀要』第59号、2021年、64-74頁。
- 「【問題提起Ⅱ】実験と言説——綱島梁川からの宗教思想運動」、『現代と親鸞』、46号、2022年、187-202頁。
- 「宗教体験を認め合うこと——星川啓慈の「言語ゲームとしての宗教」論の検討——」、龍谷大学社会学部学会編『龍谷大学社会学部紀要』、62号、2022年、154-166頁。
- 「宗教心から宗教的要求へ —— 「日本の宗教哲学」のなかの植村正久——」、龍谷大学社会学部学会編『龍谷大学社会学部紀要』、66号、2025年、1-14頁。

根無一行

- 「ポストコロニアルの神義論——希望なき抵抗」、龍谷大学社会学部学会編『龍谷大学社会学部紀要』、59号、2021年、75-85頁。
- 「レヴィナスのヨブ記解釈」、大谷大学哲学会編『哲學論集』、68号、2022年、30-48頁。
- 「希望なき祈りとカントの「信」——『純粹理性批判』『規準論』から」、龍谷大学社会学部学会編『龍谷大学社会学部紀要』、62号、2022年、140-153頁。
- 「自己への嘘」としての祈り——カントにおける「信」と「反省的判断力」、京都哲學會編『哲學研究』、610号、2023年、51-98頁。

山根秀介

- “The Theory of Truth in William James’s Pragmatism and Objectivity of Religious Studies,” *Religious Studies in Japan*, Vol. 7(Supplementary Issue), 2024, pp.89-103.
- 「ウィリアム・ジェームズの宗教論における共同性の問題」、龍谷大学社会学部学会編『龍谷大学社会学部紀要』、59号、2021年、51-63頁。